

氏 名 (本 籍)	つぽ い よし き 坪 井 美 樹 (東 京 都)		
学 位 の 種 類	博 士 (言 語 学)		
学 位 記 番 号	博 乙 第 1666 号		
学位授与年月日	平成12年11月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審 査 研 究 科	文芸・言語研究科		
学 位 論 文 題 目	日本語活用体系の歴史的変遷に関する研究		
主 査	筑波大学教授		林 史 典
副 査	筑波大学教授	博士(文学)	湯 澤 質 幸
副 査	筑波大学教授		高 田 誠
副 査	筑波大学助教授		大 倉 浩
副 査	筑波大学名誉教授	文学博士	小 松 英 雄

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語の〈活用〉に生じた諸変化を、活用語が文法機能の違いをみずからその形態に発現させてきたところの、内的変化であると見なす立場から、一連の現象に共通する動因を認め、それに基づいて活用およびその体系の歴史の統一的解釈を提示したもので、次のような構成を採っている。

序章

第Ⅰ部 動詞活用体系の変遷(第1章～第3章)

第Ⅱ部 音便形と活用体系(第4章～第6章)

第Ⅲ部 〈オホ〜〉の意味と形態の分化をめぐる諸問題(第7章～第8章)

第Ⅳ部 助動詞の語形変化と活用形(第9章～第12章)

結語

「序章」は、この研究の目的と方法に関する総説である。先行研究が現象を個別的に考察しすぎた結果、事象間の因果関係が解明されていない点を批判するとともに、「活用語の形態変化も、諸動因の矛盾的合一として実現される」等といった、本論の前提となる「仮説」について論じている。

第Ⅰ部は、この研究の根幹をなす論で、〈終止形と連体形の合流〉〈二段活用的一段化〉という日本語の活用語に生じた二つの大きな変化を取り上げ、これに統一的な解釈を加えることを通じて、平安時代から現代に至る活用およびその体系の歴史を俯瞰している。次いで、奈良・平安時代における音韻体系の変化と活用体系との関連を論じ、平安時代の活用体系の歴史的位置づけを行っている。

その第1章「終止形連体形合流と二分活用的一段化」は、〈終止形連体形の合流〉と〈二段活用的一段化〉が偶発的で相互に無関係な現象ではなく、〈活用の型の単純化〉と〈形態の示差性の実現〉という二つの原理に貫かれた相関する変化であることを論じている。第2章「上代音韻体系における甲類乙類の差異消滅と活用体系」では、〈上代特殊仮名遣い〉に反映された音韻的対立の消滅が、動詞の活用体系においても〈形態の示差性〉を減少させ、平安時代以降の新たな〈形態の示差性〉獲得の動きを生む一因となったことが論じられている。第3章「平安時代における「命令形」の成立」は、第1・2章で採った説明原理を命令形に及ぼした論である。すなわち、平安

時代における四段・カ変・ナ変・ラ変活用の命令形が終助詞「ヨ」の添加を任意とするのに対し、その他の活用の命令形がそれを義務的とするのは、上代の音韻体系が変化したために減少した〈形態の示差性〉を、母音変化方式と語尾添加方式との対立の枠組みの中で部分的に回復しようとした結果であることを論証している。

第Ⅱ部は、活用形としての〈音便〉の成立と機能に関する論で、音便と呼ばれる現象に形態音韻論的観点からの基礎的検討を加えた後、動詞と形容詞の音便形について考察している。

第4章「〈音脱落〉の形態音韻論的検討」では、〈音脱落〉との関連において音便現象を検討し、そのような現象に対する著者の見解を示して、以下の第5・6章を先導している。第5章「活用形としての動詞音便形の成立」の中心論拠は、〈動詞連用形における音便形の成立〉である。形態間の融合度を示すという音便の機能には段階的差異が認められることを指摘した上で、活用形としての音便形が〈形態の示差性〉を表示する機能を担って成立したことを明らかにしている。また、同じ観点から、サ行四段動詞の音便形等、音便形の歴史的変遷過程で問題となる諸事象についても解釈が試みられている。第6章「形容詞の音便形」では、活用形としての音便形の発達が遅れしかも不徹底であった形容詞について、動詞の場合と比較した検証が行われている。

第Ⅲ部は、第Ⅰ部および第Ⅱ部における議論から派生する問題の検討に当てられ、状態性の意味を表す活用語が意味分化をどのように形態的差異として実現したかを、形態素〈オホ〜〉を例に考察している。

まず、第7章「古代官職名に見る接頭辞〈オホ〜・オホキ〜・オホイ〜〉」では、古代日本における官職の和名に用いられた三種の接頭辞〈オホ〜・オホキ〜・オホイ〜〉について、オホキ〜→オホイ〜→オホ〜の順で後部成素との結合度が密になることを実証している。それを承けて第8章「古代日本語における《大》と《多》—終止形オホカリの成立—」は、①上代以前〈オホ〉は《大》と《多》の二義を有したこと、②形容詞〈オホシ〉の各活用形成立後、連用形〈オホク〉は《多》の意味に、連体形のうち名詞を修飾する〈オホキ〉は《大》の意味に偏るようになったこと、③平安時代に至り、連用形〈オホク〉から派生したカリ活用〈オホカリ〉が《多》の意味に限定され、連体形〈オホキ〉から派生した形容動詞〈オホキナリ〉が《大》の意味に限定されたのは、そうした変化の延長であること、④和文で《多》の意味にカリ活用〈オホカリ〉が用いられるのは、当時の和文が漢字による意味の支えを持たなかったことに関連すると考えられること等を明らかにしている。

第Ⅳ部は、助動詞の活用が主題である。中性の助動詞に関する検討を通じて、助動詞類にはその変遷の中に〈辞化に伴う語形縮約〉〈活用語尾の保存の欲求〉という相矛盾する二つの力が働いていること、また、ある活用形が他の活用形の形態変化を誘導する場合があること等を主張している。

最初の第9章「ムズ(ル)とウズ(ル)」では、ムズルがウズに変化し、そのウズを元にウズルが発生する過程を〈辞化に伴う語形縮約〉および〈活用語尾の保存の欲求〉という二面から説明している。次いで第10章「ウズ(ル)とマ(ジ)イ」では、中世末期のウズとウズルが談話機能の違いを示すのに対し、マイとマジイは、話し手の言表内容に対する捉え方の違いが形態上の差異となったものと考えられること、また、マイとマジイ両形も〈辞化に伴う語形縮約〉と〈活用語尾の保存の欲求〉との矛盾の合一として成立した可能性があること等を指摘している。さらに第11章「ラウ(メ)とサウ(ヘ)」では、中世後期の文献に見える推量の助動詞ラウの已然形ラウメと、丁寧の助動詞サウの已然・命令形サウヘについて、その形態の発生を〈語形を縮約させつつ無変化助動詞化しようとする動き〉と〈活用形の指標としての活用語尾保存の欲求〉という相反する力の矛盾の合一に求める解釈を提示している。最後の第12章「語形変化を誘導する活用形」では、活用語尾のル音が脱落する事例を分析し、活用語の語形変化には他の活用形の形態変化を誘導する有力な活用例が存在する場合があることを論じている。また、それを通じ、助動詞タリがタに変化した理由等についても推定している。

「結語」は、本論文全体の総括である。研究の成果を自己評価するとともに、変格活用動詞の歴史的立場づけに関する問題等、将来の課題を明示している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

文献上の事実には詳密であっても、個別の事象および事象間の関係に対する言語史的解釈にはきわめて関心が薄かった従来の研究体質に、実践を通じた批判を加え、研究のあるべき方向を示そうとする点に本論文の大きな目標があるが、その達成に相当の成功を収めている。本論文に表された具体的成果は、およそ次の4点に要約できる。

- (1) まず特記すべきは、音韻組織の再編に伴う活用体系の変化、終止形と連体形の合流、二段活用的一段化等、従来個別に論じられてきた事象について、〈活用の型の単純化〉〈形態の示差性の実現〉といった共通の動因にもとづく一貫した解釈を提示し得たことである。日本語の文法史における主要な変化に密接な歴史的関連性を見出すこのような視点には、大きな説得力が認められる。平安時代の命令形に対する解釈もまた、そうした視点の有効性を証明している。
- (2) 音韻史のテーマとして取り上げられてきた音便を、活用体系の枠組みにおいて捉え、活用形としての音便形の成立を〈形態の示差性〉という観点から解釈するのも注目すべき新しい視点である。勿論、音便はそれ自体、そのような枠組みに収束される現象ではないが、動詞の音便と形容詞の音便の異質性をそうした観点から解き明かそうとするところなどには、大きな方法的示唆が存在する。
- (3) 複雑な変化が錯綜する中世末期の助動詞の、特異な形態変化について、そこに働く要因と形態変化の実態を解明し、統合的な解釈を示したことも特筆すべきである。今後の研究には、同様の視点に立った全般的見直しが求められよう。
- (4) これまで十分な説明が試みられなかった形容詞〈オホシ〉のかり活用や形容動詞〈オホキナリ〉の成立、形容動詞活用語尾〈～ナ〉や指定の助動詞〈ヂヤ〉、過去の助動詞〈タ〉の成立などの事実には、一貫した史観から説得的な解釈を加えた点も著しい成果の一つである。

著者の研究がたいへん高い水準で結実していることに疑問の余地はないが、今後の発展のために課題となる点が皆無ではない。その一、二を挙げれば、本研究が重視する〈形態の示差性〉すなわち‘活用の型を区別する形態上の特徴’等といった要因に関しては、機能主義的あるいは運用論的観点からの議論の深化を通じて、いっそう説明原理としての射程の拡大が期待されるという点である。音韻体系の変化と活用体系の関連についても、より成熟した考究が必要とされよう。例えば、「時代を遡ると（五十音図の）全ての行においてカ・ガ行等と同じ形態上の特性が見られたのではないか」といった推測が成り立つか否かには、歴史的音韻論の研究成果を踏まえた慎重な検討が要求される。また、「弱化した音節がどのような音韻に仕立て直されたか」といった表現にしばしば用いられる‘仕立て直し’については、本論文にとって不可欠な用語であるだけに、比喩の域を越えた客観的説明を与えることが望ましい。

以上のような点が指摘されるとは言え、本論文は、学界の現水準を優に越えた先導的試行として高く評価される。

よって、著者は、博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。